

# 山王



奉祝御大典 天皇陛下御即位

子歲新春号

日枝

日枝



## 新春を迎えて

日枝神社氏子崇敬会長 小池 百合子

令和二年の新年を迎え、新春を寿ぎ謹んでお慶びを申し上げますとともに、日枝大神様の広大なご加護が皆様の上に蒙り奉られ、本年も良き年となりますようご祈念申し上げます。

さて、日枝神社の氏子崇敬会第七代会長を拝命してから、早くも三年弱の月日が流れました。この間、皆様からのお力添えを頂きながら、由緒ある日枝神社氏子崇敬会の会長という重責を果たすべく努めてまいりました。東京都知事としての任期も折り返しを過ぎ、気を引き締め直して都政に邁進する所存でございます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

本年は、二〇二〇東京オリンピック・パラリンピックの開催年であります。東京都といたしましても、これまでの色々な施策の総決算となる年です。東京二〇二〇大会を成功させ、「伝統」と「革新」が共存する東京の魅力を発信していくため、さらには、その先の東京・日本の持続的な成長を果たしていくために、様々な施策を行っていく所存です。

東京二〇二〇大会は、東京のショーウィンドーにもなり、日本の技術を世界に発信する大きなチャンスだと捉えております。EVや水素エネルギー自動車の普及による「ゼロエミッション東京」、先駆的な技術を持つベンチャー企業を支援する「イノベーション・エコシステム」、そして今回のオリンピックのレガシーとなりうる5Gによる電波の道、イノベーションの柱となる、5Gネットワークの構築事業「TOKYO Data Highway」。東京二〇二〇大会の成功はもとより、その先の東京・日本の持続的な成長に向け、着実にしかしスピード感をもって展開していきたいと考えております。

昨年は天皇陛下の御退位及び皇太子殿下の御即位と、わが国にとりまして極めて重要な一年となり、様々な国家行事が恙無く行われ、平和で実り多い年となりました。

本年は子年。相場格言では「子は繁栄」と言われております。十二支の中で一番最初に数えられる子年は、新しい物事や行事、新たな事が始まる年になると考えられており、また子孫繁栄や経済の繁栄の象徴としても、大変縁起の良い年とされております。格言通り、東京二〇二〇大会を大成功させ、稼げる東京を目指し、様々な具体策を実施してまいります。

結びに、本年も国家の安寧と弥栄、日枝神社のご神徳の昂揚とご社頭のご隆昌、氏子崇敬会の更なるご発展、また皆様のご健勝とご多幸を心から切にご祈念いたしまして、令和二年年頭のご挨拶とさせていただきます。

## 新春祭典・行事のご案内

- 一月 一日(水) 若水祭  
神能「ひとり翁」奉奏  
山階彌右衛門師 奉仕  
歳旦祭
- 一月 三日(金) 元始祭
- 一月 六日(月) 奉納書初展感謝奉告祭  
山王奉書会・記念講演
- 一月 十三日(月) 印章護持祭
- 一月 十五日(水) 月次祭
- 一月 十八日(土)～十九日(日) 神宮初詣旅行会
- 一月 二十七日(月) 新年互礼会
- 二月 三日(月) 節分祭追儺神事

## 特別寄稿



参議院議員 山谷えり子

皇紀二千六百八十年、令和二年の幕開けを謹んでお慶び申し上げます。

新年を迎えるにあたり、天下泰平、国土安穩、聖寿無窮、万民豊樂を祈念いたします。

昨年は御代替わりの御慶事が続き、国民の多くがご皇室を戴くわが国のありようを再認識しただけでなく、国内外に日本の長い歴史と伝統、文化を広く理解いただけたことと思います。

私も様々な儀式、式典に参列させていただき、改めて日本の国柄を体いっぱい感じてまいりました。

十月二十二日の即位礼正殿の儀には宮中で国内外の招待者約二千人とともに、十一月九日の皇居前広場での即位をお祝いする国民祭典には三万人と、翌十一月十日の祝賀御列の儀には約十二万人の人々と沿道で、世界でもっとも長く紡がれてきたご皇室の存在、美しさに歓喜の声が溢れました。

十一月十四日、新天皇が即位された後に新穀を神々にお供えし、ともに召し上がる皇位継承に伴う一世一度の重要祭祀である大嘗宮の儀では、陛下の祈りとともにありたいと参列し、太古の昔の人々とつながる幸福感に包まれました。

十一月十六日の大饗の儀では、大嘗宮の儀で供えられた白酒、黒酒を賜り、つつがなく慶祝行事が終えられたことに安堵いたしました。また世紀の大行事を支えてくださった関係各位のご協力にも感謝申し上げます。次第です。

令和となつて初めて迎える庚子<sup>かのえ・ね</sup>の本年は、終わり改めながら、新たなスタートを迎える年と言われている。まさに、今の日本の姿を表しているような干支周りであると感じます。今年はいよいよ東京オリンピック・パラリンピックを迎えます。

アスリートたちの活躍が全世界の人々の勇気と希望となるよう大いに

期待しています。

六十年前の庚子の年は、岸信介総理の下で日米相互協力及び安全保障条約（新安保条約）が成立、その後池田勇人内閣では初の女性大臣が誕生、年の瀬が近づいた頃には池田総理が「国民所得倍増計画」を打ち出しました。

翌年からの十年間で国民総生産を倍増させる目標でしたが、結果的には計画以上の高度経済成長に至りました。

私が所得倍増計画の演説を聞いたのは、小学生の時でした。友人たちとお菓子を食べながら福井のわが家で遊んでいた時、国会演説の画面が飛び込んできたのです。独特の渋みのある総理の声を聞きながら、「お金が二倍になるんやざあ、おやつも二倍になるんやざあ」と嬉しくなつて、私たちは卓袱台のお菓子をほおぼり大笑いしたことを鮮やかに思い出します。

先日、話を伺った八十一歳の女性社長さんは、子育ても終え、介護していた両親を看取った五十五歳の時に公民館での講座に参加し、お饅頭やお赤飯、お物産を販売する会社を立ち上げ、近所の主婦の皆さんと元気に活躍されていました。平均年齢七十歳の皆さんは「働くのが楽しい」「孫にお小遣いをあげることで

ができるのが幸せ」と口々に喜びを語ってくださいました。

新年を迎えた今この時も、人間関係や病氣、経済的に困難を抱えて暗やみにある人もいますでしょう。光の中にある人でも、春の優しい陽の光ばかりではなく、灼熱の陽に照らされている人もいます。

勤勉で誠実で真面目な日本人の性格からか、幾分働きすぎの現代の大人たちに、心身ともに余裕を持つてもらおうと働き方改革や再チャレンジ支援なども進んでいます。

いつでも、誰もがチャレンジできる社会に、そして日本の強みであるチーム力を活かした底力が存分に発揮できる成熟した社会となるよう願っています。

昔の子供たちは、国のかじとりに素朴な期待を寄せ、朗らかであったと思います。

いい国に良きタイミングで生まれたことを感じ、喜び生きることが出来た少女時代の恩返しに、次の世代に希望を与える環境づくりが出来たらと祈りをたずさえながら日々勤め励んでまいりたいと思います。

結びにあたり国家の安寧と皆様のご多幸を心より祈念し、新年のご挨拶とさせていただきます。

# 山王祭

—日本三大祭—



本庄市本町 祭禮保存会 会長

猪 野 芳 孝

## 中山道最大の宿場町 「本庄」と江戸祭禮の 地方への伝播

本庄市は埼玉県北部に位置し日本橋から十番目の宿場で、江戸時代後期には中山道六十九宿の中で最大の宿場町として栄えました。(写真1)  
近隣の物産はこの本庄宿を流れる利根川の水運を利用して一大消費地である江戸へと運ばれました。このような流通の過程で江戸の祭礼と富が本庄にもたらされました。この地域周辺では江戸時代より養蚕業が盛んで、明治期になると生繭生産全国第一位となり、「繭の町本庄」と言われる程に発展しました。明治の偉人「渋沢栄一」も隣町の深谷宿出身で、近年世界遺産となった富岡製糸場を興し、本庄の繭糸産業に多大なる影

響を及ぼした事も本庄市の歴史を語る上で大変重要な出来事です。さらに地元出身の偉人としてヘレンケラーに影響を及ぼした「埴保己一」がおります。

ここで改めて本庄宿の祭りの概要を簡単に説明致します。現在本庄には夏と秋に二つの祭があり、今も江戸の祭禮の形態を色濃く残しています。江戸では「天下祭（山王祭り、神田祭り）」に見られる山車祭りと宮神輿の祭りである「江戸祇園祭（江戸天王祭）」の二種類の大祭がありました。本庄にはこの「山車祭禮」と「神輿祭禮」の両方の祭禮様式が伝播しております。

まずは夏祭りですが、酷暑の七月中旬（土曜日と日曜日）に「祇園祭り」として開催され、二十数基の神輿が市中を渡御します。(写真2) その



写真 1

中でも本町町会が代々引き継いでいる「天王祭」(写真3)は本庄宿の歴史を語る上でとても重要な繋がりがあり、鎌倉街道にあった定期市(月に六回開催されていた)の権利を寛文三年(一六六三年)に隣町からを

譲り受けたとされています。その時、牛頭天王を祭神とする市神様も同時に譲り受け市の繁栄と疫病退散の願いを込め、その年の六月二十七日に祭りが執り行われました。その後宝暦十年(一七六〇年)に本庄の総鎮守

である金鑽神社が神輿を新調し宿内渡御(神幸祭)が行われました。数年後の明和四年(一七六七年)に本町町会が大阪の宮屋九郎兵衛より天王神輿を購入(写真4)、翌明和五年(一七六八年)六月二十六日に先



写真2



写真4



写真3



写真5



写真 6

述の市神様をこの本町天王神輿に遷宮し、翌日の二十七日に神輿渡御(神幸祭)を行った記録が残っています。次に秋祭りである「本庄まつり」(写真5)ですが、秋も深まった十一月二日と三日に毎年開催されております。二日はそれぞれの町会が自町内を廻り、三日が本祭りとして朝から各町が中山道で山車を順次出迎えながら隊列を組んで神社に集合します。正午になると花火の合図とともに神社神輿を中心とする神幸祭(写真6)が厳かに出発します。そしてその後には続き、当番町の祭典委員長の掛け声とともに付祭りとして山車



写真 7



写真 8

が動き出し、宿はずれの御旅所までの華々しい巡行がスタートします。山車で演奏されているお囃子は、徳川氏発祥の地である「世良田東照宮」で有名な群馬県太田市の世良田町の祭り囃子が源流とされています。中山道を神幸祭の神聖な行列に続き、当時さながらの着物や半纏などの祭り衣裳で着飾った子供や大人の祭り人達が人形山車の綱を引きながら練り歩く様は、まさに江戸時代に將軍様に上覧するために江戸城に入城した「江戸天下祭」が描かれた錦絵の光景そのままです。(写真7)

この山車引きの歴史は、明治五年(一八七二年)に町の中心部である仲町町会が日本橋の十軒店(現在の日本橋室町四丁目)に店を構えていた「原舟月」より山車を購入したことが本庄宿に江戸型山車が登場した始まりとなりました。この後、明治から大正にかけて競うようにその他の町会が江戸の老舗の店より山車を

購入しました。さらに、平成になり二町会が山車を製作し令和に至る現在は「江戸天下祭」の影響を受けた絢爛豪華な十本の山車が年に一度の例祭で笛や太鼓の優雅な音色とともに本庄市中を巡行します。(写真8)

この十本の山車のうち七本が明治期に「江戸天下祭」の山車を作った「原舟月」「横山朝之」「浪速屋七郎兵衛」から購入した山車です。何故このような山車が本庄にあるのかは私の推測ではありませんが、当時、本庄宿を開いた新田源氏の末裔である戸谷半兵衛という豪商がおり、重要な役割を果たしたと思われる。この戸谷半兵衛は江戸の横山町に土地を購入、その四年後に室町の鳥屋五兵衛より店を買い取り日本橋に進出し、商いをしていたと言われています。

す。このような人々から江戸の文化が徐々に本庄にも伝播し、祭りといえば「江戸天下祭」、となれば神田や山王の祭事で使われていた山車と同じ物をこの地でも是非とも購入して引き廻したいという思いが当時の町衆にあったからではないでしょうか。

ところで、前述した本町町会が夏の祇園祭りの神幸祭で担いでいる天王神輿は明治十二年(一八七九年)に東京で修理をしたと言いつた記録が無く定かではありませんでした。しかし、平成三十年(二〇一八年)の夏祭りの片づけをしている時に、その様子を中央区日本橋より見学に来ていた山瀬一男氏が、神輿の屋根裏の梁に書かれた墨書きを解説

したところ

「これは日本橋で修理をしていますよ。ここに『通二』(写真9)と書かれてあるでしょう。これは今の日本橋高島屋が有るところですよ。平成最後の年に大発見！本庄の山車も神輿も東京(江戸)と繋がっている証拠ですね。」

と興奮ぎみに私に教えて下さいました。このような偶然からまた一つ本庄の祭りの歴史が紐解かれたことは、非常にありがたいことで、山瀬氏には本当に感謝しております。

令和を迎えた今日、川越市をはじめ、佐倉市や栃木市など関東の各地で行われている山車、屋台、神輿を用いた様々な祭りがありますが、これらの祭りを私も何度も見聞して改めて思うことは、「江戸天下祭」が当時の人々には本当に凄い一大祭禮であって、それを見て感動した地方の人達はその有様を伝播し、影響を与えてきたのだと思います。そして今現在でも祭禮文化の発信源は大東京であることは間違いないのではないのでしょうか。

私も先人から託された日本の伝統文化を絶やすことなくしっかりと次の世代に伝えて行くことに決意を新たに致しました。



写真9



謹みて新年の

御祝詞を申し上げます

頌 春

令和二庚子歳

日枝神社

代表役員 宮西修治  
 責任役員 細田安兵衛  
 同 中澤彦七  
 同 福原義春  
 同 大澤忠政  
 同 澤田晴子  
 同 杉山博孝  
 責任役員 大塚正行  
 権宮司





# 謹賀新年

略称敬不同順

日本橋吉野鮎本店 吉野正敏 代表取締役	川崎定徳(株) 川崎眞次郎 代表取締役	木村實業(株) 木村平右衛門 代表取締役	中西瀝青ホールディングス(株) 森口友美子 代表取締役	金子架設工業(株) 青木茂 代表取締役	小宮山印刷(株) 小宮山貴史 代表取締役	八丁堀 茅場町・兜町	北見不動産(有)会 北見芳夫 代表取締役	北見千穂	(資)北見商店 北見まさゑ 代表社員	いちよし証券(株) 小林稔 執行役社長	エスビー食品(株) 小形博行 代表取締役	(株)プレナス 塩井辰男 代表取締役
新日本不動産(株) 中島信子 代表取締役	京橋 大澤ローヤル 大澤忠政 代表取締役	(株)トミタ 富田正一 取締役会長	清水建設(株) 井上和幸 取締役社長	中島金屬箔粉工業(株) 中島武 代表取締役	(株)ギンザのサエグサ 敬 代表取締役	新銀座橋	(株)小松ストア 小坂敬 代表取締役	(株)木村商店 木村暖子 代表取締役	(株)小林傳次郎中央地所部 小林久子 代表取締役	やす幸 石原壽 松井俊樹		
(株)銀座ナイン 柴田孝則 代表取締役	正金商事(株) 蛸原宗久 代表取締役	(株)新橋玉木屋 田巻章子 代表取締役	銀座越後屋 永井甚右衛門 八代目	(株)銀座木村家 木村美貴子 代表取締役	(株)銀座木村家 木村美貴子 代表取締役	銀座吉田(株) 吉田民雄 代表取締役	(株)泉屋東京店 泉由紀子 代表取締役	コトー商事(株) 野玉善一 代表取締役	きねや足袋(株) 中澤貴之 代表取締役	(株)錦屋マリエマリエ 勝田久美子 取締役社長		
東京中央青果(株) 鈴木敏行 代表取締役	京橋大根河岸会 鈴木敏行 会長	(株)フエム 藤田誠 代表取締役	(株)ミロク情報サービス 是枝周樹 代表取締役	(株)ホットアート 望月秀峻 代表取締役	鈴木徽章工業(株) 鈴木健之 取締役会長	(株)アーバンネットコーポレーション 服部信治 代表取締役	(株)井筒装束店 佐織鉄郎 代表取締役	(株)高田装束店 加藤充則 代表取締役	(株)大槻装束店 大槻奈津子 代表取締役			



頌 春 令和二庚子歳	日枝神社	宮司 宮西修治	権宮司 大塚正行	権 宜 高原聖司	権 宜 鎌田周作	権 宜 土田幸大	同 八巻岳秀	同 片山徹	同 内田博之	同 杉山正吉史	同 手塚和記	同 松橋裕晃	同 高野大樹	同 佐藤祐貴	同 中島大二郎
------------------	------	---------	----------	----------	----------	----------	--------	-------	--------	---------	--------	--------	--------	--------	---------





平成三十一年・令和元年 回顧

一月	元旦	若水祭 歳旦祭
二月	二日	小池百合子氏子崇敬会長参拝
	三日	元始祭
	六日	第五十五回奉納書初展感謝奉告祭
	八日	神社本庁鷹司統理参拝
	十三日	印章護持祭
	十五日	神符焼納祭
	十九日	第五十七回神宮初詣旅行 至二十日
	二十八日	新年互礼会
	二十九日	神社本庁田中総長吉川副総長参拝
三月	三日	節分祭
	十一日	紀元祭
	十七日	祈年祭
	二十四日	天皇陛下御即位三十年奉祝祭
三月	六日	第五回責任役員会 第五回神社総代会（大総代会） 氏子崇敬会評議員会
	二十一日	春季皇霊祭遙拝



祈年祭



新年互礼会

四月	十日	天皇皇后両陛下御結婚六十年奉祝祭
	二十一日	御讓位御安泰祈願祭
	二十七日	末社山王稲荷神社例祭
	二十九日	昭和祭
五月	一日	践祚改元奉告祭
	五日	御神田田植祭 於 千葉県香取市
	二十九日	御垣内清掃奉仕
	三十一日	第六回責任役員会
六月	七日	第六回神社総代会（大総代会） 責任役員大総代会合同会
	十七日	山王まつり
	七日	八坂神社例祭
	十三日	撰社祭
	十五日	例祭
	三十日	大祓並鎮火祭
七月	二十日	緑蔭朝詣りとラジオ体操の集い 開会奉告祭（八月末日迄）
八月	四日	第四十四回箸感謝祭
	二十六日	星岡会（旧職員会）



## 大嘗祭の「標の山」

武蔵大学教授・國學院大學大学院講師 福原敏男

天皇御即位後初、一代一度の新嘗祭を大嘗祭と称し、天皇が新穀を中心とする神饌を神に献げる祭りであり、令和元年十一月十四・十五日、厳かに執り行われた。大嘗祭は昭和三年（一九二八）の京都御所から、平成二年（一九八九）には東京・皇居へ移されるなど、世の流れにに応じて大きな変容を遂げてきた。

本稿では、応仁の乱前の数百年前まで、悠紀・主基両国より調進された標の山について述べる。この二基は大内裏（平安宮の場合は朝集院庭中、大嘗宮の前庭）において両国役人の並ぶ位置（境域）を示すため設置された標識塔であり、大嘗祭の威儀を高める装飾塔でもあった。上部に両国や齋郡の名が書かれ、中心に本物の樹木が立てられることが多く、下部は山形などの造り物で飾られた。標の山は大嘗祭ごとに連綿と造られてきたが、大嘗祭が十五世紀

に戦乱や経費不足で中断して以来、途絶えたまま現在に至る。

標の山の飾り物には、古代中国の神仙界の物語や祥瑞の故事などに基づく情景が選ばれ、宮廷絵所絵師が完成予想図を描き、標師の指揮下、細工師が組み立てた。北野齋場に標の山制作の「造標屋」が各一字建てられたが、その大きさは方四丈、高三丈八尺、十尺以上の建物であった。

平安時代の「大嘗祭は、旧曆十一月中卯日に神饌類や標の山を北野齋場より平安宮まで巡行しながら運び、三千五百人、五千人ともいわれる大行列が都大路を渡り、中心の「御稲」集団の先頭に標の山が並び、台車に載せて曳かれた。曳行は基本的に、北野齋場南門より大内裏まで南下し、悠紀は大内裏の左（東）・主基は右（西）を南下する。七条通りで東の悠紀は西、西の主基は東へ折れ

て朱雀大路で両国の行列が合流し、最後は揃って北上し平安宮へ、というコースであった。

平安貴族の日記によると、二条室町の棧敷席では院などが、二条高倉では摂政の唐車が見物したが、行列は現在の祇園祭山鉦巡行のように順序正しく行列するわけではなかった。貴族たちの見物車や馬が道路に面して並ぶ前を、両国の標の山が互いに先を競い合い、見物車を引つ掛けたら、混み合って遅々として進まないという年もあった。両標の山が競い合って奔走した結果、前輪が壊れたり、車軸が折れて死傷者まで出す喧騒のなか、神饌類を紛失したり、損うケースも多く、無事であったことが未曾有の出来事とされた程であった。

大行列の主役は上京した両国齋郡の人々、つまり畿内の外の地方民による晴舞台であり、両国によるライバル心を露わにする競争となった。

行列は朱雀門、応天門より入り、標の山は大嘗宮を囲う柴垣の南側外に、翌辰日には移動して豊楽院庭中に台車より降して据えられた。大嘗祭終了後、標の山は天皇の間近に運ばれ、天皇と後宮の女性たちによつ

て嘆賞されることもあり、その後解体された。

もともと標や標の木という目印自体は宮廷儀式に一般的であったが、華美に大型化した標の山とは、豪華な素材に丹念な細工を施した造り山を愛でる「造山遊宴」という中国の風習が日本の宮廷儀式に摂取されたものと考えられている。

標の山は大嘗祭のみならず、新嘗祭の宴や相撲会にも据えられた。それらには儀式成立期より唐風装飾が施され、例えば平城遷都以前の標の山には、橋が金銀珠玉の装飾とともに用いられた。

そもそも大嘗祭は新嘗祭と同一の儀式であり、七世紀末に大嘗祭が分離されて即位儀礼の意味をもつようになつた経緯からすれば、唐風装飾は大嘗祭の成立時点にまで遡ると推測されている。『万葉集』によると、新嘗祭の標の山（島山と表記）も同様な唐風装飾であった。

従来、標の山の画証として、鷹司家伝来の「大嘗祭図」（宮内庁書陵部蔵）が知られている。これは天長十年（八三三）の『続日本後紀』をもとに、近世に想像復元された図であろう。絵師は「標の山」という山

形のイメージにより山裾をなだらかに拡げており、本図が固定設置した状態の復元図であることがわかる。

これに對して、中嶋宏子氏が平成二年頃に描いた「悠紀・主基標山想定復元図」（紙本著色二幅）は台車に



悠紀標山



主基標山

載せられ、中心の樹木が強調された小ぶりの山形であり、実際の姿に近いものと思われる。

ところで、折口信夫は標の山を標山と呼び、大嘗祭に降臨する神の依代と解することにより、祭礼の山鉾や山車など（以下、山鉾）の源流と考えた。山鉾も標山のように神を迎える装置、動く依代とした。

つまり標の山を、大嘗祭に迎え降ろした神を奉じて、大嘗宮に練り込む移動神座とし、標山や山鉾に對し、神が祭りに降臨して標る<sup>しめ</sup>占める（占有する）造り山という新たな意味を与えた。

山鉾は、中世後期に断絶した大嘗祭の標の山の後を引き継ぐかのようになり、展開したもの、山鉾には標識としての要素はなく、両者は性格上、繋がらない。折口後の研究者が大嘗祭に据えられた標の山を山鉾の源流とし、「置山から曳山（山鉾）へ」の変遷論を説き、今日なお支持されている。その背景には、山岳信仰に基づく聖なる山が想定され、不動の置山こそ古代の姿であり、後世、山の靈力を造り山に移して、町（都）を巡行するようになったとする。

一方、「風流離子物から山鉾へ」

という山鉾成立論が論じられ、山鉾のルーツは中世後期の西日本に成立した「造り物、歌舞音曲や仮装などが練り歩く風流離子物」にあり、その中心には離されて練る傘鉾などの造形物があつたとされる。都市民はこれらを母体として山鉾を生み出したが、その背景として、夏季の疫病などの災厄を除くため、その元凶とされた疫神を山鉾に依りつかせ、離しながら居住地（氏子地）外に送り出そうとする信仰があつた。

元来、祭りごとに毎回新作される簡素な張子作りの山鉾は、終了後に流したり壊すものである。その趣向は当座性・一回性であつたものの、その後、各都市民の嗜好に応じて、財力や職人技が傾注されて美術工艺品となり、造形が固定化されていった。

一方、大嘗祭の標の山は成立より断絶まで、基本的には毎回新らしく作られる工芸品であり続けた。いずれにせよ、両者とも成立期より装飾が施され、巡行を前提とするものであつた。

〈参考文献〉福原敏男「大嘗祭の標の山、折口信夫の標山」國學院大學博物館編集・発行『大嘗祭』展図録、令和元年十一月

# 奉納

内閣府辞令専門職茂任修身殿（新元号発表時に官房長官が示した「令和」の揮毫を御担当）より、元号「令和」を揮毫した色紙、並びに元となった和歌を揮毫した色紙の御奉納があり、令和元年十二月三日に奉納奉告祭を執り行いました。



## 日枝神社家庭曆上梓

「令和二年庚子年<sup>かのえね</sup>日枝神社家庭曆」。  
現在、二百円にて頒布中です。



# 御神米づくり 抜穂祭



9月7日に神社職員と氏子崇敬者、総勢25名で千葉県香取市の御神田に赴き、恒例の抜穂祭を執行しました。  
天候にも恵まれ、祭典後の稲刈り奉仕では御神田の殆どの部分を手作業で刈ることができました。  
そこで収穫された新穀は11月14日の大嘗祭当日祭にお供えされました。

## 国民祭典の奉祝祭り

令和元年十一月九日に天皇陛下御即位をお祝いする国民祭典の奉祝祭りが皇居前広場にて行われ、東京都内から多数の神輿、山車が繰り出されました。当社からも神輿と山車が一基ずつ出され、盛大に御即位を奉祝しました。



# 計報

大総代 三枝 進殿

令和元年十一月十一日

三枝進殿は平成二十年七月から当神社大総代、氏子崇敬会常任理事を務められ、神社の維持運営に御尽力頂きましたが、令和元年十一月十一日に御逝去されました。

（行年八十二）

茲に御功績を称え、謹みてご冥福をお祈り申し上げます。

## 山王台通信

### 就任

責任役員 杉山博孝殿  
三菱地所株式会社  
（令和元年十月二十日付）

### 神社本庁辞令

主典 佐藤祐貴  
主典 中島大二郎  
日枝神社権禰宜に任ずる  
（令和元年六月一日付）

権禰宜 勅使河原翔平  
群馬県 笹森稻荷神社禰宜に転任  
（令和元年七月一日付）

### （通巻百三十五号）

発行 令和二年一月一日  
編集 日枝神社社務所

東京都千代田区永田町二丁目十番五号  
（郵便番号 一〇〇一〇〇一四）  
TEL 〇三―三五八一―二四七（代表）  
FAX 〇三―三五八一―二〇七七  
<http://www.hiejinja.net/>



©わたせせいぞう

## 令和2年厄年表 (数え年)

### 男の厄年

前厄	本厄	後厄
平成9年生 <b>24歳</b> うし	平成8年生 <b>25歳</b> ね(ねずみ)	平成7年生 <b>26歳</b> ゐ(いのしし)
昭和55年生 <b>41歳</b> さる	昭和54年生 <b>42歳</b> ひつじ	昭和53年生 <b>43歳</b> うま
昭和36年生 <b>60歳</b> うし	昭和35年生 <b>61歳</b> ね(ねずみ)	昭和34年生 <b>62歳</b> ゐ(いのしし)

### 女の厄年

前厄	本厄	後厄
平成15年生 <b>18歳</b> ひつじ	平成14年生 <b>19歳</b> うま	平成13年生 <b>20歳</b> み(へび)
平成元年生 昭和64年生 <b>32歳</b> み(へび)	昭和63年生 <b>33歳</b> たつ	昭和62年生 <b>34歳</b> う(うさぎ)
昭和60年生 <b>36歳</b> うし	昭和59年生 <b>37歳</b> ね(ねずみ)	昭和58年生 <b>38歳</b> ゐ(いのしし)

東京都千代田区永田町2丁目10番5号  
TEL. 03-3502-2205  
FAX. 03-3502-8948  
<http://www.hieakasaka.net/>



日枝神社  
結婚式場

ひ え  
**日枝** あかさか